Wong Partnership (シンガポール) での研修報告

長岡隼平

・派遣先について

Wong Partnership(以下、「Wong P」)は、300名近い弁護士を抱え、オフィスは「世界で最も高所にある屋上プール」で有名な総合リゾートホテル「マリーナ・ベイ・サンズ」と同じくマリーナ・ベイ沿いに位置し、高層ビル3フロアを訴訟・コーポレート/M&A・ファイナンスの各グループが占める、シンガポールの中でも Big 4 に数えられる大規模事務所です。Wong P は、国外にも北京、上海、ジャカルタ、クアラルンプール、アブダビ、ドーハ、ヤンゴンにブランチを有していますが、彼らのプラクティスは、基本的にはシンガポール法の専門家であるシンガポール人弁護士が国内企業を中心とするクライアントにアドバイスを与えるというものであるため、シンガポールオフィス内部の雰囲気はそれほど国際的というわけではなく、日本の大規模事務所と大きな違いはないと感じました。ただ、シンガポールでは英語に加えて中国語(マンダリン)、マレー語、タミル語が公用語とされているということもあり、弁護士やスタッフ間で複数の言語が日常的に飛び交ってはいました。私自身は母語である日本語以外は英語しか使えないため、業務は全て英語で行いました(当時 Wong P に日本人は出向・インターンともに自分以外おらず、日本語を使用する機会はありませんでした)。

・派遣先での業務

私は、将来、弁護士として海外進出を行う企業をサポートしたいと考えており、その旨をロースクール及び派遣先に伝えた結果、期間中は Wong P のコーポレート/M&A グループでお世話になることとなりました。以下では派遣先での各業務について記述します。私が派遣された当時、Wong P には日本絡みの案件で研修生がタッチできるものはなく、私が期間を通じて行った業務はクロスボーダーM&A 案件、国内ジェネラルコーポレート案件に大別できます。クロスボーダーM&A については、当時進行中であった複数の案件について、問題が起こった時にすぐに対応できるよう、概要を把握する必要がありました。そこで、各種契約書等の資料からその時点までの事実関係や経緯を整理し、自分で後に参照するための簡単なメモを作成しました。多くの資料を読み込んだことで、クロスボーダーM&A の過程でどのような当事者が存在し、どのような書類がそうした当事者間で交わされるのかを学ぶことができました。また、それまでの経緯から紛争に至りそうな流れのものもあり、契約の中でどのようなところに紛争リスクが潜んでいるのかという一例を見ることができました。私はロースクールの国際契約交渉というクラスでクロスボーダーM&A の模擬交渉を行った経験があったので、エスクローのようなこの分野特有のシステムについてはスムーズに理解できました。ジェネラルコーポレートについては、多くの案件に触れましたが、

中でも印象に残っているのは、世界的なアパレルブランドが各国販売店に商品を供給する際の契約書をレビューするという業務です。Wong P では東南アジア地域の販売店との契約書につき、所内外の各国法弁護士が連携してチェックを行うという作業を行っており、同地域のハブとして機能するシンガポールならではのプラクティスであると感じました。また、証券取引所関係の外部開示資料の作成補助も行いました。上場会社が投資家に適時に必要な情報を開示するという概念そのものが日本での勉強からわかっているため、特に難しいところはありませんでした。他にも、企業の内部で使用するコンプライアンス関係の資料作成も行い、業務の幅の広さを実感しました。業務が終わってやる時間がない時には、マネージングパートナーの先生に直接アポを取ってインタビューしたり、メンターの先生や暇そうな他のインターン生と談笑しにデスクに突撃したりしていました。そのような会話の中で、メンターの先生が、弁護士である以上いかに事務上の些末な事柄であっても手は抜けない、外に出る自分の仕事の成果物には 100%の確信を持ちたいとおっしゃっていたことに感銘を受けました。

・同世代との交流

Wong P には私と同時期に、約 30 名のインターン生が 2 週間の研修を行っていました。彼らは皆シンガポール人ではありますが、国内のロースクール生は半数であり、残りの半数はイギリスのロースクール生ということでした。イギリスのロースクールを卒業した者にもシンガポール法の司法試験を受験する資格が与えられるという制度設計が背景にあるようで、彼らの多くは卒業後シンガポールに帰って弁護士として働くことを志していました。一方で、私がデスクを並べて共に勤務していたのは、アソシエイトとしての本採用前のプラクティス・トレーニーと呼ばれる方々でした。彼らはある意味「お客さん」のインターンとは異なり、Wong P の一員として実際の案件に深く関与していました。こうしたインターンやトレーニーといった方々とは、同世代であり、時間も比較的あるということで、ランチタイムや休日といった場面で本当に仲良くすることができました。国籍は違えど、ロースクールを経て企業法務に携わるという同じ目標を持つ者同士だからこそできる、お互いの夢や悩みの話は、私自身の人生観にも大きな影響を与えるものであったと感じています。

・最後に

「法律しか知らない者は、法律を知らない。」という言葉聞いたことがあります。いくら法律を知っていても、それが適用される実社会について何も知らなければ何の意味もない、というのがその趣旨であると理解しています。この言葉の持つメッセージをもとに考えると、本プログラムにおいて法律に関することとそれ以外のことという両面で多くの得難い経験をさせて頂けたことは、私自身のキャリアの中で非常に大きな意味を持つのではないかと思います。まず、法律に関することについては、コモン・ロー体系をもつシンガポー

ルにおけるプラクティスであっても、ビジネスローの領域では多くの概念が日本法と共通しており、少なくともインターン生としては特段の困難なく業務を遂行できるという自信ないし実感が得られました。これはもちろん、東大ロースクール時代に多くの英語を用いた授業やサマースクールを経験したという「慣れ」があつてのことだとは思いますが、日本の会社法の授業で扱われるような、個々の規定が各ステークホルダーのどのような利益を考慮しているか等という根本の部分からの理解と、こちらもロースクールで学んだ、常に論理的たれという姿勢さえあれば、海外のローカル法律事務所での研修を行うというハードルは、英語を媒介として何とか越えることができるものであると感じました。また、法律以外のことについては、多民族国家であるシンガポールでの暮らしから様々なことを学びました。海外で暮らすということは自分にとって初めての経験でしたが、2012年に東大サマースクールプログラムで共に学んだシンガポール人(サマースクール当時彼は NUS のロースクール生でしたが、このときには Wong P とは別のファームで弁護士としてのキャリアをスタートしていました)をはじめとする多くの友人に、休日や仕事終わりに国内のあらゆる場所に連れて行って頂けたことで、多様な文化が絶妙なバランスを保って融合し、東南アジアのハブとして機能するシンガポール社会が動く様子を体感できました。今後、世界の経済社会はますますボーダレスなものとなり、現在のシンガポールのように異文化が融合し入り混じるという現象が世界中至る所で起こっていくのだと思います。もちろん日本企業も例外ではなく、そうした中に身を置くことになるわけであり、その日本企業にアドバイスを与えて日本経済に貢献することを志す私にとっては、派遣先での毎日とはとてつもなく刺激的なものでした。将来、日本企業を代理する弁護士として、今回 Wong P で出会った同世代の仲間あるいは先輩方と国際的な舞台で再会し、協業する機会が得られることを夢見て、今後ともより一層精進して参りたいと思います。最後にはなりますが、今回貴重な機会を与えて下さった岩村先生、神田先生、藤田先生、事務局の小疇様、また Wong P の皆様、さらにはご後援頂きました各企業の関係者様に、心より感謝を申し上げます。